

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 14 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530942

研究課題名（和文）音楽文化形成における教育の役割と自国文化認識の世代間、文化間比較

研究課題名（英文）A Comparative Study of the Role of Education in the Formation of Musical Culture and the Perception of National Culture between different Generations and Cultures

研究代表者

石井 由理 (ISHII YURI)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：70304467

研究成果の概要（和文）：文化のグローバル化と混合における学校教育の役割を解明すべく、日本とタイの政策比較と質問紙調査を行った。日本の2世代間、日・タイ大学生間の比較から、明治以来の学校教育を通じた音楽文化の近代化は、日本の全体の音楽文化に唱歌・童謡として根付いたが、個人の領域では西洋ポップスの影響が大きいこと。政府が積極的に介入しなかったタイでは、国、個人のいずれにおいても西洋ポップスの影響が大きいことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of clarifying the role of school education in the process of cultural globalization and hybridization, literature-based study and questionnaire-based study were conducted. The results indicate that modern Japanese cultural policy has created a new national musical culture but the influence has not reached people's private musical lives and that in Thailand, where state did not play an active role in cultural transformation, both collective and individual musical identities are dominated by Western-style popular music.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：音楽教育、学校教育、グローバル化、近代化、文化的アイデンティティー、日本、タイ

1. 研究開始当初の背景

文化のグローバル化によってローカルな文化にどのような変化が起きるかは、多くの研究者が関心をもっているテーマである。先行研究の調査から、一つの文化への収斂、それ以外の諸文化の自己主張の強化、文化の混

合などがグローバル化に伴う諸現象としてあげられる中で、開国後に西洋文化を取り込んでいった明治維新以後の日本の近代化プロセスが、文化のグローバル化による文化混合の解明のヒントとして着目されていることが明らかとなった。また、グローバル化は、

市場経済の中で従来国家が担ってきた役割を、ほとんど国家の存在感がないといわれるまでに弱めていると考えられていることもわかった。このため、日本における明治維新以来の文化の混合プロセスと結果としての現在、その中で国家が担った役割を明らかにすることで、文化のグローバル化現象の解明に貢献できると考え、この目的に適した事例として、近代学校教育の開始と同時に教育計画に取り入れられ、国家によって近代日本にふさわしい音楽文化への誘導が積極的になされた音楽教育を取り上げることにした。

また、現学習指導要領にも見られるように、1960年代以降の学校音楽教育では、音楽文化の西洋化が進む中での日本の伝統音楽文化の継承も大きな課題となってきた。グローバル化の進行によって普遍的な音楽文化としての西洋大衆音楽がますます影響力を増す中、日本の若者にとって、伝統音楽とはどのような存在となっているのか、政府の伝統文化尊重の政策の効果はどの程度あるのかも、実証的に研究する意味があると考えた。

現在の日本の音楽文化の状況が、日本の近代化における選択の結果であることを確認するには、異なる選択をした比較対象が必要である。このため、自国の意志によって近代化を行ったにもかかわらず、音楽文化の西洋化には国が積極的に介入せず、むしろ伝統音楽重視の政策を取ってきた非西洋の国として、タイを比較する事例とすることにした。

2. 研究の目的

本研究では、文化のグローバル化によって西洋の文化が普遍的な文化として浸透していく中で、国はどのように文化の独自性の維持と普遍的な文化の受け入れを両立させるのかを、日本とタイの近代化プロセスにおける国家の意図としての音楽教育・文化政策分析と、その結果としての両国国民の自国音楽文化認識の比較分析によって実証的に明らかにすること目的とした。

3. 研究の方法

研究の方法としては、国の音楽文化形成に対するインプットとしての政策に関する文献調査、その政策のアウトプットとしての人々の音楽文化認識を調査するための質問紙調査の二つを併用した。そして日本とほぼ同時期である19世紀末に独立国として自国の意思で近代化を進めたタイを比較の対象として選び、日本の異なる世代間、日本とタイの異なる文化間でこれらの結果を比較した。具体的には以下のとおりである。

(1) 日本とタイの近代化プロセスにおける文化・教育政策比較に関しては、日本語および英語文献による文献調査を行った。

(2) 政策のアウトプットとしての音楽認識を実証的に調査すべく、異なる時代の学校教育を受けた、日本の60歳以上の人々(76名。会社OB会、地域の集会、催し物会場などで実施)と大学生(251名。東京学芸大学、山口大学で実施)を対象とした音楽文化認識に関する質問紙調査を、両世代とも東京都内および山口県内で実施し、比較した。調査内容は「日本の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」「好きな音楽・よく聞く音楽」の各項目に対し、頭に浮かんだ曲名を10曲以内で回答するものである。

(3) さらに、現代、同じように文化のグローバル化にさらされているアジアの他の国であっても、国の政策の違いによって、音楽文化に何らかの違いがあるのかを比較するために、タイの大学生(199名。タマサート大学、シルパコン大学で実施)を対象とした同じ内容(「日本の音楽」に関してはかわりに「タイの音楽」)の質問紙調査を実施し、比較分析した。

(4) 上記の異なる世代間、文化間の質問紙調査の分析結果を、日本・タイ両国のこれまでの音楽教育政策の類似点・相違点と合わせて考察した。

4. 研究成果

(1) 日・タイ近代化プロセスにおける音楽政策比較から明らかになったのは、両国ともほぼ同じ時期に近代化の必要性に迫られ、学校教育を通じた国民の育成を認識していたにも関わらず、近代化における音楽文化に関する政策の選択が異なっていたということである。そしてその結果、現在義務教育レベルの音楽教育で扱われる音楽のタイプにも違いが生じている。

明治維新期の日本が、旧体制下の社会階層や社会儀礼に縛られることなく、学校教育を手段とした全国民を対象とした新しい文化の形成や新しいリーダーの育成へとまい進したのに対し、絶対王政下での近代化を進めることとなったタイでは、まず、王族および貴族に対するエリート教育が優先され、一般国民に対する学校教育の提供と文化の近代化は後回しとなった。日本では1900年頃に普通初等教育がほぼ普及したのに対し、タイでは1980年代までこれを達成できなかった。

また、日本では全国民の音楽文化の近代化を図るべく、近代化と同時に学校音楽教育の内容を吟味し、教材、教育課程、教育方法などの普及によって、西洋芸術音楽をベースとした近代音楽文化の普及に努めたが、タイでは、絶対王政下における宮廷音楽文化が発達し、王族をパトロンとした伝統音楽文化が、一般庶民の音楽文化とは遊離した状態で発

展していたため、西洋音楽を取り入れた新たな音楽文化を一般庶民も含めた全国民に普及させようという意図が存在しなかった。タイにこのような政策が登場するのは1930年代になって絶対王政から立憲君主制に移行し、ピブソンクラム首相が国政を担うようになってからのことである。しかし、この時にはすでにラジオや映画が普及し、西洋芸術音楽の影響を受けたタイ音楽のみならず、西洋大衆音楽を取り入れたタイポップスも広まりつつあった。さらに、ピブソンクラム首相の失脚後の歴代政権は、この音楽文化の近代化政策を継続せず、学校音楽教育においてはタイの伝統音楽文化重視へと回帰した。また、最初は政府によって普及がはかられたタイポップスは、後に都市富裕層が好むタイポップスと農村および農村出身の貧困層が好むタイカントリーポップスへと分かれて発展した。

現在の日本とタイの義務教育レベルの音楽教育で教えられている音楽の種類は、日本では唱歌も含めた西洋音楽理論に基づく教育目的の音楽が圧倒的に多く、その他として伝統音楽、西洋芸術音楽、外国の民族音楽、世界の大衆音楽などがあるが、タイの中学校に関する先行研究では、バンコク地域で教師が教えている音楽はタイポップスが一番多く、ついでタイ伝統音楽、タイカントリーポップス、西洋ポップス、西洋芸術音楽となっている。

(2) 日本における2世代の質問紙調査から明らかになったのは、以下のことである。

①「日本の音楽」に対する回答は、60歳以上の高齢者、大学生とも、大変よく似ていた。もっとも多かったのは、唱歌や童謡などの明治維新以来の政策が進めてきた西洋芸術音楽理論をベースとする音楽であり、いずれの世代でも50%以上を占める。曲名も、滝廉太郎作品が多い以外は、様々な曲があげられ、カテゴリーとしてのこの種の音楽が、「日本の音楽」のイメージとして定着していることがわかる。

この次に多かったのは「伝統」カテゴリーの曲で、大学生の回答では25%、高齢者では20%がこれにあたる。このカテゴリーの回答は、「さくらさくら」と「君が代」に偏る傾向がみられた。この傾向は特に大学生で強く、2曲合わせた割合は「伝統」カテゴリー全体の8割近くになる。高齢者では37%にとどまり、他に民謡や雅楽などの回答が入る。高齢者にとっては「伝統」カテゴリーそのものが「日本の音楽」のイメージとしてあるのに対し、大学生では前述の2曲のみに代表される。

3番目に多かったのは日本の大衆音楽で、大学生15%、高齢者19%である。

②「我が国の音楽」に対する回答は、伝統音楽のカテゴリーがもっとも多く、大学生で回答数の42%、高齢者では47%であった。しかし、大学生では圧倒的に「君が代」「さくらさくら」が多かったのに対し、60歳以上の回答ではそれほどこの2曲に偏らなかった。特に「君が代」に関しては、大学生の「伝統」カテゴリーの回答中、60%以上を占めたのに対し、高齢者では25%程度であった。この違いは、国歌として学校教育で徹底された時代に育った世代と、戦争の反動の時代に育ち、「君が代」を国歌と呼んでいなかった世代の違いであると思われる。また、60歳以上では、この他に多様な曲名の回答があったのに対し、大学生では他の曲名は少なかった。つまり、伝統音楽が「我が国の音楽」を代表しているというよりも、これら2曲が代表していると考えたほうが妥当である。

2番目に多かったのは唱歌・童謡系の音楽であり、それぞれの世代で30%を超え、曲名も多様であった。3番目は日本の大衆音楽で、いずれの世代でも10%強であった。

③「郷土の音楽」に対する回答では、世代間に大きな違いがみられた。高齢者では全回答数のうち過半数が「伝統」カテゴリーの曲であり、民謡が多かったが、大学生では「伝統」カテゴリーは34%にとどまり、第二位の唱歌・童謡系の28%が僅差で続く。高齢者では唱歌・童謡系はわずか8%であり、この種の音楽に対する認識が大きく異なる。大学生の回答の中身をみると、「ふるさと」や「赤とんぼ」など、一般的なふるさとのイメージを歌った曲が多く、「郷土の音楽」を自分自身の郷土に結び付けて考えるという意識が高齢者よりも希薄である。高齢者ではむしろ県歌や町民歌など、地域の歌が21%と多く、第二位となる。あくまでも自分自身の郷土との関連で回答しようという姿勢が顕著である。地域の歌は大学生では17%で第3位である。大学生で4番目、高齢者で3番目に多かったのが日本の大衆音楽で、いずれも10%程度である。

④「好きな音楽・よく聞く音楽」

この項目に対する回答は、いずれの世代とも日本の大衆音楽がもっとも多かった。しかし、大学生ではこの種の音楽が回答の74%を占めたのに対し、高齢者では45%であり、この差を埋めるように高齢者に多かったのが大衆音楽を含めた外国音楽(35%)である。外国音楽は大学生の回答では20%であった。両世代とも3番目に多いのは唱歌・童謡系の音楽で、大学生は4%、高齢者では11%であった。

(3) タイの大学生に対する質問紙調査から明らかになったのは、以下のことである。

① 「タイの音楽」への回答は、タイポップスが最も多く約85%、後はカントリーポップス、伝統音楽、西洋芸術音楽に影響されたタイ音楽、外国ポップスなどがごく少数ずつ存在する。文献調査から明らかになったように、タイポップスを聞く社会階層とカントリーポップスを聞く階層がはっきり分かれており、富裕層・高学歴層に愛好される傾向のあるタイポップスは、ブルジョア音楽であると考えられる傾向がある。つまり、上品で歌いやすく、西洋音楽文化のもつ普遍性を共有しているタイ音楽と考えられ、この点において、同様の3条件を備えた日本の音楽として促進された日本の唱歌・童謡と共通するものがある。

② 「我が国の音楽」に対する回答は、「タイの音楽」に対する回答とは全く異なり、国王や王族、教師などに対する敬意を表すために西洋芸術音楽の要素を取り入れて作られた賛歌が最も多く、全体の34%を占める。次に多いのがやはり西洋的な音楽である国歌であり、「我が国」の音楽とは、音楽スタイルにかかわらず、国家や国王のことを歌った内容の歌詞を持つものと認識していることを示している。同様の理由から、現国王作曲のジャズも6%ほど回答があった。次に多いのは、1930年代の近代化の中で作られた西洋的な音楽であり、約14%であった。大衆音楽は、カントリーポップスとタイポップスがほぼ同数で5%弱、伝統音楽は3%に過ぎなかった。曲目にも偏りが見られ、国歌を回答したものが全640回答中152、19世紀のラーマ5世時代に西洋音楽の要素を取り入れて作られた国王賛歌の回答が126あった。

「我が国の音楽」からの国家・国王の連想は、日本での調査においてやはりこの項目の回答として多数を占めた「君が代」と共通している。

③ 「郷土の音楽」に対する回答は、伝統音楽が最も多く36%、ついで1930年代の近代化で作られた西洋式音楽が27%、カントリーポップスが21%であり、他の項目と比べてカントリーポップスの多さが際立った。これは文献調査から明らかになった、カントリーポップスと農村および農村出身の労働者との結びつきの強さによるものと思われる。回答者は大学生でありながらも、タイ社会全体に浸透しているこのイメージを共有していることがわかる。

④ 「好きな音楽・よく聞く音楽」は、タイポップスが37%、アジアポップスも含んだ西

洋的外国ポップスが60%強であった。これらの合計は100%近くになり、タイの学生個人の音楽生活は、ほとんど西洋的ポップスに限定されていると言える。しかし、この結果は、対象を学生に絞ったためでもあり、一般大衆を対象とした場合は、先述の都市富裕層と農村貧困層の音楽文化の分離状況から、カントリーポップスが多くなることが予想される。しかし、いずれにしても西洋ポップスの影響を受けた大衆音楽であることには変わりなく、伝統音楽や国家の近代化プロジェクトとしての音楽が個人の音楽文化としては浸透していないことが明らかとなった。

(4) 以上の日本とタイの文化・教育政策比較、日本の2世代間、日・タイ学生間の質問紙調査の結果の比較から、日本が近代化と共に政府のプロジェクトとして進めた唱歌の普及政策の結果、「日本の音楽」の代表としてこの種の音楽が根付いていること。一方で、このような政策を取らなかったタイでは、これに当たるジャンルが文化の中の一つの層として形成されなかったことがわかった。これに基づき、アジアの国が西洋音楽文化を自国音楽文化に取り入れる過程において、その選択が結果に何らかの影響を与え得るという結論を得た。

また、その一方で、その影響力の限界も示された。つまり、明治維新期の日本のように、メディアが発達していない時代に、政府が選択した西洋的音楽を、学校教育を通して徹底的に普及させ、その方針が現在まで一貫している場合は、国民の集団としてのアイデンティティーとしてその音楽が国民の音楽文化に根付くことができたが、これは国民集団としての共通の音楽文化の領域にとどまり、個人レベルの音楽文化においては国家の影響は及ばず、メディアの発達による文化のグローバル化によって世界を席卷しつつある西洋大衆音楽文化が、どちらの国においても浸透しているということである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 石井由理

「タイの若者のタイの音楽に対する認識」
『山口大学教育学部研究論叢』査読無し、
61巻、2011年、1-12頁。

② 石井由理

「戦後の教育政策と高齢者の音楽文化」
『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』査読無し、30号、2010年、91-100頁。

③ 石井由理・塩原麻里

「日本の音楽に対する大学生と60歳以上の
の人々の認識」

『山口大学教育学部研究論叢』査読無し、
60巻、2010年、15-26頁。

〔学会発表〕(計3件)

① 石井由理

“Diverse, dynamic and integrated: A
glance at Japanese musical culture through
a case study of the perception of Japanese
music by university students and people
over sixty years old”

The 11th Cultural Diversity in Music
Education Conference, 2012年1月5日,
National Institute of Education, シンガ
ポール。

② 塩原麻里

“The role of music leaders in a Japanese
folk song community: Going beyond formal
and informal music learning”

The 11th Cultural Diversity in Music
Education Conference, 2012年1月5日,
National Institute of Education, シンガ
ポール。

③ 石井由理

“Perception of Japanese Music, Music of
Our Country, and Hometown Music by
Different Generations”

The 29th International Society for Music
Education World Conference, 2010年8月2
日, China National Convention Centre, 北
京, 中華人民共和国。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 由理 (ISHII YURI)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：70304467

(2) 研究分担者

塩原 麻里 (SHIOBARA MARI)

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：10290652